volume 123

変わる日本の「暮らし」と「まち」

「人づくりはまちづくり」の精神を未来につなぐ新たな拠点づくり

新潟県長岡市　大手通坂之上町地区
第一種市街地再開発事業
2014年●平成26年～

阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration by Shigeyuki Sakata

東京駅から上越新幹線に乗って約1時間半。日本三大花火のひとつに数えられる長岡花火で有名な、新潟県長岡市。この地には、まちづくりの根幹となる「米百俵の精神」がある。

幕末に勃発した戊辰戦争での敗北で、長岡藩は貧困と飢餓に苦しんだ。その窮状を知った三根山藩から贈られた米に、藩士たちは糊口をしのげると喜んだ。しかし、藩の大参事小林虎三郎は、「国がおこるのも、まちが栄えるのも、ことごとく人にある。食えないからこそ、学校を建て、人物を養成する」と米を食すことなく、国漢学校設立の資金に使用。藩士の子弟だけでなく、町民や農民の子どもにも入学を許し、人づくりに取り組んだ結果、長岡復興と新生日本を担う多くの人材を輩出したのだ。目先の利益でなく、将来を見据えた教育で豊かなまちをつくる、この「人づくりはまちづくり」の精神は、今も長岡の人々に脈々と受け継がれている。

○工事が進む現場で見学会を開催

国漢学校開校から150年以上経った現在、学校跡地では未来の長岡を支える新たな拠点づくりが進められている。その名も「米百俵プレイス」。コンセプトは、「『人づくり』と『産業振興』を総がかりで支える地方創生の拠点」だ。

10月9日。工事が進む現場で、市内の小学生親子を招いた「工事現場見学会」が開催された。この企画は、長岡まちゼミ実行委員会が「まち」と「お店」のファンづくりのために行っている「長岡まちゼミ」の一環。開催を担ったのは、長岡市商店街連合会と、「米百俵プレイス」の再開発事業を施行するUR都市機構だ。

参加者は、工事の概要説明を受けたあと、ヘルメットをかぶって、「まちなか図書館」となる現場を見学。タブレットをかざすとバーチャル完成図が見える最新技術を使っての説明に、子どもも大人も興味津々だ。

小2、小5の妹と参加していた中学2年生の女の子は「今と未来の違いがわかって面白い。完成が楽しみ！」と笑顔。「工事現場を見られるなんて滅多にない機会なので、親子で参加しました」と話すお父さんに、「子どもが安心して遊べる場所ができるのは、とてもありがたいですね」とお母さんも言葉を添える。小学2年生の女の子と参加していたお母さんは「将来施設ができたとき、今日のことを思い出して楽しめそうです。冬は雪が積もって遊べるところが少ないので、うれしいですね」と話してくれた。

工事現場見学会で案内役を務めたURは、2014年から長岡市と一体となって「米百俵プレイス」が建つ大手通坂之上町地区の再開発事業を推進している。多岐にわたる地権者との交渉などの豊富なノウハウを活用した事業の組み立てのほか、地区内の大規模敷地を取得して事業の下支えを遂行。現在は施設の整備や民間事業者との連携などを行い、新しい長岡市のまちづくりに尽力している。

UR長岡都市再生事務所の森合弘毅は「『米百俵プレイス』は、4棟の建物からなる大規模なものです。西館と東館には、公益施設である『米百俵プレイス ミライエ長岡』として、今回見学会を行った『まちなか図書館』などの『人づくり・学びの場』、大学や産業界との交流・連携による新しいビジネスの創造を目指す『産業づくり・交流の場』、多世代が気軽に集い、交流する『にぎわいの場』の3つの役割を果たす施設と、銀行、商工会議所などが入ります。ほかにクリニックと立体駐車場が入る北館、ショップや共同住宅が入るプレミスト大手通で構成されます」と、事業の内容を説明する。

○まちの中心に人を呼び戻す

「米百俵プレイス」は、長岡市が抱える課題解決にも大きな役割を果たす。長岡市では、平成に入ったころからモータリゼーションの進展や郊外部での市街地拡大に伴い、中心市街地の空洞化が目立ってきた。そこで、市が始めたのが、市内に分散していた公共施設を中心市街地に再配置する『まちなか型公共サービス』の取り組みだ。2012年には、アリーナや公会堂機能、市役所や議会が一体となった「アオーレ長岡」をオープン。他にも、子育て支援の拠点となる子育ての駅「ちびっこ広場」や、学びと交流の拠点となる「まちなかキャンパス長岡」、福祉の拠点「トモシア」などを続々開設。その仕上げともいえるのが、「米百俵プレイス」なのだ。

着々と進む工事現場を見学する親子。完成した内部の様子をMRでも体験。

長岡市商店街連合会の安藤栄治理事長は、「この施設が建つ駅前は、まさに長岡市の顔となる場所です。今回の工事現場見学会では、長岡市の将来を担う子どもたちに、この施設を訪れてもらい、駅前に親しみをもってもらいたいと催しました。1回目の昨年は敷地に建っていた旧大和百貨店の地下躯体に落書きをしてもらいました。地下躯体は今回のビルの基礎として残すため、次回の建て替え時にはタイムカプセルのように現れる仕掛けです。今後は『米百俵プレイス』が起爆剤となって長岡駅前に人が戻り、かつての活気が取り戻せればいいですね」と期待を込める。

長岡市の未来と市民の期待を担って。「米百俵プレイス」の各施設は、来年の夏以降、順次オープンする予定だ。

街に、ルネッサンス
UR 東北の復興まちづくりに 全力で取り組んでいます
UR都市機構
［企画制作］新潮社